

写真雑感

山田 剛三

《フォトショップ青空のこと》

フォトショップ青空を開店したのは、2000年の9月のことだった。その前年に二十数年働いた電機会社を早期退職し、職を探していた長男と一緒に写真屋でもやってみようかということになった。

神奈川フジカラー町田営業所のSさんと、一緒に探し廻って、本格的なDPE店のない百合丘に開店することにした。

店の名前は最初、写真館も兼ねていたので「山田写真館」にしようかと思った。写真館の店主というとなかなか響きがいい。だが、長男が「青空」がいいということで、「フォトショップ青空」に決めた。ちょうどNHKの朝ドラで「私の青空」という番組が放映されている頃だった。

以前から写真を写すことが好きで、知識も若干持ってはいたが、DPEに関しては、あるいは成人式や七五三などの商業写真に関してはほとんど素人同然だった。富士フィルム本社での2日間の研修と、DPE設備設置時の1週間のOJTで何とか開店を迎えることができた。

開店してからすぐ、写真好きの人たちがたくさん集まって来て、店を応援していただいた。半年もたたないうちに「青空会」ができた経緯は鍋田さんの文章に詳しい。現会員の皆さまや、今は惜しくも亡くなってしまった方々のことをいろいろ思い出す。花の写真が好きで、前ぼけや後ぼけの技法を教えてくれたNさん。写真には空間が大事だということを実践で示してくれたNさん。鍋田さんの文章にもあった、初代会長のKさん。とにかくお元気で、本当に写真の好きな人だった。プリントをしながらいろいろ学んだ。経営難のため12年間で頓挫したが、今は懐かしい思い出ばかりが残っている。

もし写真店の名前が「山田写真館」だったら、「青空会」の名前は「山田会」になっていたかも知れない。そもそも「青空会」という名前は、医療法人か宗教法人のような感じがしませんか。**写真集団「青空」**なんてどうですか。格好いいじゃないですか。なんて言ったら叱られるから絶対に言えない。

《カメラのこと》

最初に一眼レフに接したのは、兄が持っていたニコンフォトミックというカメラを貸して貰った時だった。その時、何を写したのか全く記憶がない。学生時代にカメラ雑誌を眺め中判カメラが鮮明に撮れることを知って、最初買った一眼レフがゼンザブロニカの6×6だった。それでいろいろな風景写真を写した。また、白黒フィルムの現像にも興味を持ち、真夜中に寒い部屋で現像、焼付け、引き延ばしをしたことも思い出す。その後キャノンや、ゼンザブロニカの6×7や、ニコンなどいろいろ購入しては、せっせと売りまくった。

就職してからも雑誌で新しいカメラが発売されたのを知ると、欲しくて仕方がない。そのうちカメラのキタムラのある店の店長さんと親しくなって、欲しいカメラやレンズを会社のデスクから電話で注文するだけで、月賦で買うことができるようになった。ワイフも鷹揚で余り気にしない。10ヶ月の月賦で買って、ばれなくてホッとしていると、5ヶ月くらい経ってから貯金通帳をもって来て、「これは何ですか」と指を指す。仕方がないので正直に話すと、それで許してもらえた。今でも時々、「おまえが甘いから家はお金がたまらないんだ」と威張っている。盗人猛々しいとはこのこと。

《いい写真とは》

いい写真とは何だろう、と時々考える。

いい写真とは、当然まず本人が感動する写真でなければならない。本人が満足しないような写真が、他の人に感動を呼び起すことはないだろう。どうしたら

満足する写真が撮れるのか。5W1Hで、何を、誰を、いつ、どこで、何のために、どのように写すのかが大切なのは分かるが、それだけではない。なぜなら、同じような条件で写しても、上手な人と、私とではできばえが全く違ってくるのだ。いったいどこに差があるのだろうか。

私は、その一つが「執念」ではないかと思う。いい写真を撮るんだ。人を感動させる写真を撮るんだという強い動機が、写真の出来映えに決定的に影響してくるのではないか。ただし、その気持ちがあまり強すぎると、やけに力んだつまらない写真になってしまうだろう。さりげない「頑固さ」が必要なのだ。

一生の間に一枚で良いから、そんな感動的な、素晴らしい写真を撮ってみたいと思う。そうでなければ、写真愛好家として死ぬに死ねない。ただ、今は寒くて外に出掛けるのがつらいな（それじゃだめじゃん）。